

森元齋著 『国道3号線：抵抗の民衆史』

大場, 健司
九州共立大学共通教育センター：講師

<https://doi.org/10.15017/4737371>

出版情報：九大日文. 38, pp.55-57, 2021-10-01. Association of Japanese Literature, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

◎書評

森元齋著

『国道3号線——抵抗の民衆史』

大場 健司

黒い一冊である。表紙の装面に描かれているのは、夜の「国道3号線」。帯にはこうある。「九州を掘りおこせ! / 鹿児島・西南戦争から北上し、水俣病裁判、サークル村、筑豊炭鉱、米騒動まで、中央に抗し続けるこの(島)の闘いをたどる物語」。「国道」とは「国家」の「道路」と書くが、本書ではその「国家」に抵抗するオルタナティブ (Alternative) な民衆の歴史が、「国道」を駆け抜けながら逆説的に開示されている。

著者の森元齋氏はホワイットヘッド (Alfred North Whitehead, 1861-1947) やアナキズム (Anarchism) の研究で著名なアナキスト (Anarchist) である。筆者 (大場) が森氏の著作を最初に読んだのは、ちくま新書から森氏の『アナキズム入門』(筑摩書房、二〇一七年三月) が出版された時に遡る。その『アナキズム入門』では、鶴見俊輔 (一九二二-二〇一五年) による「アナキズムは、権力による強制なしに人間がたがいに助けあって生きてゆくことを理想とする思想」というアナキズムの定義が参照され、その「相互扶助」の思想が高く評価されていた(二五四-二五五頁)。

近年では、アナキズム関連の書籍が多く出版されており、二

〇二〇年に入ってからだけでも、デヴィッド・グレーバー (David Graeber, 1961-2020) の『ブルシット・ジョブ——クソどうでもいい仕事の理論』(Bullshit Job: A Theory, 2018) やルース・キナ (Ruth Kinna, 1961-) の『アナキズムの歴史——支配に抗する思想と運動』(The Government of No One: The Theory and Practice of Anarchism, 2019) の日本語訳や、的場昭弘 (一九五二年-) の『未来のブルードン——資本主義もマルクス主義も超えて』(垂紀書房、二〇二〇年五月)、山田広昭 (一九五六年-) の『可能なるアナキズム——マルセル・モースと贈与のモラル』(インスクリプト、二〇二〇年九月)、柄谷行人 (一九四一年-) の『ニュー・アソシエーション (ニスト宣言)』(作品社、二〇二二年一月)、栗原康 (一九七九年-) の『サボる哲学——労働の未来から逃散せよ』(NHK出版、二〇二二年七月) などが出版されている。以上のようなアナキスト本では、①「贈与」に基づく「互酬性」(Reciprocity)、②「労働」そのものの廃絶、③権力なき「アソシエーション」(Association) などが探究されてきたと言ってもよい。

それでは、『国道3号線』において提示されている「相互扶助」的なアナキズムとは、どのようなものだったのだろうか。

「はじめに」では、そのような「相互扶助」に基づく「コミュニティ」(Commune) の可能性を「九州」という地方から考察した際にモチーフとなったものとして、次の三つが挙げられている。

①映像集団「空族」の映画『国道20号線』(二〇〇七年一月) で描かれた「郊外」。

②酒井隆史 (一九六五年-) の『通天閣——新・日本資本主義発達史』(青土社、二〇二二年一月) において

掘り起こされた、大阪という都市の表情。そして、③水俣病との闘争を行なった医師、原田正純（一九三四―二〇二年）の「水俣学」。本書では、こういった視座から「九州」を新たにまなざすことで、「抵抗」の地図が生成されていると言つてもよい。それは「九州」から「東京」という「中心」を脱中心化する試みであると同時に、「九州」と「アジア」の関係を考察する試みともなっている。そして、それは「国民国家や近代化とも遠く離れたベクトル」（二二頁）を、歴史の瓦礫の中から一つひとつ救い出していくことだと言つてもよい。

第一章「新政府が反動か、あるいは……—西南戦争・山鹿コミュニオン・アジアの革命」では、「国道3号線」の本来の起点とは逆の鹿児島から歴史を遡ることで、「国家の向きとは真逆の何か」（三三頁）を提示する試みがなされている。ここで主に扱われるのは、西南戦争（一八七七年）で戦死した自由民権運動家、宮崎八郎（一八五一―一八七七年）である。当時の日本では、中江兆民（一八四七―一九〇一年）によつて翻訳されたジャン＝ジャック・ルソー（Jean-Jacques Rousseau, 1712-1778）の『社会契約論』(Du Contrat Social ou Principes du droit politique, 1762) が自由民権運動に影響を与えていた。本書では、宮崎八郎がルソーの影響を受けて「山鹿コミュニオン」を創設し、そこで直接民主主義的な自治を目指したことが示される。更に、宮崎が西郷隆盛（一八一八―一八七七年）と共に明治政府を打倒し、その上で西郷や保守派を追い出す二段階の革命を目指していたことが触れられ、ウラジミール・レーニン（Vladimir Lenin, 1870-1924）の「二段階革命

論」との類似が示される。

第二章「水俣病と悶え」で主に論じられるのは、水俣病と闘った医師、原田正純や『苦海浄土』（一九六九年一月）を著した作家、石牟礼道子（一九二七―二〇一八年）である。医学や科学のレベルで人間存在を全て記述し尽くすことは不可能なのであり、本書ではそういった記述不可能なものを記述しようとする試みとして、石牟礼の言葉が評価されている。更に、ここでは言葉が発することのできない患者の言葉を紡ぐ石牟礼の態度が、ホワイトヘッドの「把握」(Prehension) の概念と重ねられる。「把握」とは科学的「把握」(Apprehension) には還元不可能な有機的な感受のことだという。

第三章「炭鉱と村」では、大牟田の三井三池炭鉱のサークル誌『サークル村』において活動を行なった谷川雁（一九三三―一九九五年）や森崎和江（一九二七年）が主に扱われている。『サークル村』に関しては、松原新一『幻影のコミュニオン—「サークル村」を検証する』（創言社、二〇〇一年四月）や水溜真由美『「サークル村」と森崎和江—交流と連帯のヴィジョン』（ナカニシヤ出版、二〇一三年四月）、宇野田尚哉・川口隆行・坂口博他編『「サークルの時代」を読む—戦後文化運動研究への招待』（影書房、二〇一六年二月）などが代表的な研究書として挙げられよう。本書ではそういった先行研究を踏まえながら、『サークル村』が日本共産党の民主集中制には還元不可能な「自主性」を有していたことが評価されている。谷川はカール・マルクス（Karl Marx, 1818-1883）の『ヘーゲル法批判哲学序説』(Zur Kritik der

Hegel, sehen Rechtsphilosophie, 1843) の影響を受けて、「村」において人間性を再獲得するという「工作者」の思想を形成したが、『サークル村』後の「大正行動隊」では「反パルタイ的パルタイ」を標榜し、多数決制度を採らない、個人の自由に基づく運動を行なったことが評価されている。

第四章「米騒動」ではまず、古代の日本列島における王権が朝鮮半島に由来するという、谷川雁の「原基」論が紹介された上で、日本の「近代化」において、日本の「原基」となったのが「九州」であり、「九州」の「原基」となったのが「朝鮮」であることが示される。「九州」には多くの軍需施設や工場が建てられ、日本の「近代化」を支えることになる。しかし、「九州」はそのような「近代化」の犠牲とされ、水俣病や炭鉱の労働問題など様々な問題が集約されることになる。本書では、そのような日本の「近代化」に抵抗する運動として、米騒動などが取り上げられている。

最後に、本書の内容を簡単にまとめると、次のようになるだろうか。①「九州」における抵抗運動の歴史をマッピングし、②ホワイトヘッドや鶴見俊輔の思想を用いながら、③「相互扶助」に基づく「アナキズム」の可能性を探ること。ここには、共産主義 (Communism) には還元され得ないアナキーな抵抗の可能性を探究する、批評的な実践があると言ってもよい。

■目次

はじめに

第一章「新政府か反動か、あるいは……——西南戦争・山鹿コ

ミューン・アジアの革命」

西南戦争／宮崎八郎の二段階革命と山鹿コミューン

寄り道「1」「中国の革命へ」

第二章「水俣病と悶え」

水俣病とは何か／悶え加勢すること／手ざわりの言葉

寄り道「2」「緒方正人『私はチツソであった』——

言葉が生まれるとき」

第三章「炭鉱と村」

サークル村／原点は存在する／「原点」／村を捨て、

村に出会う／二つの村

寄り道「3」「谷川雁における集団と組織」

寄り道「4」「伝習館裁判」

第四章「米騒動」

朝鮮よ、九州の共犯者よ／沖仲仕たちと米騒動／戦中

から戦後へ

寄り道「5」「北九州の古層」

おわりに「思考の行方——この世に根付くこと」

あとがき

(二〇二〇年八月 共和国 二七二頁 二五〇〇円＋税)

(九州共立大学共通教育センター講師)

